

# 宇佐美瀧水校訂本『王注老子道德経』について

——書誌学的観点から——

松 井 真希子

## A Bibliographical Study on Usami Shinsui's Revised Edition of “*Lao Zi Dao De Jing* Annotated by Wang Bi”

MATSUI Makiko

This paper discusses how ideas of Lao Zi and Zhuang Zi became accepted by Ogyu Sorai's school by studying Usami Shinsui's revised edition of “*Lao Zi Dao De Jing*” with Wang Bi's note. The books quoted in Shinsui's edition include: “*Lao Zi Kao Yi*” revised by Jiao Hong, “*Lao Zi Gu Jin Ben Kao Zheng*” revised by Sun Kuang, “*Lao Zi Yi*” annotated by Jiao Hong, “*Lao Zi Yan Zhai Kou Yi*” annotated by Lin Xi Yi, “*Dao De Jing Gu Ben Pian*” annotated by Fu Yi, “*Jing Dian She Wen*” written by Lu De Ming, “*Han Fei Zi*”, “*Huai Nan Zi*”, “*Lie Zi*”, “*Qun Shu Zhi Yao*”, “*Chu Xue Ji*”, and “*Zhan Guo Ce*.”

Shinsui made full use of Chinese books that was available at that time, and revised the text of “*Lao Zi*” as well as Wang Bi's note. Because there were no good editions of “*Lao Zi Dao De Jing*” with Wang Bi's note in Japan and China, Shinsui's revision made his book an epoch-making work.

キーワード：宇佐美瀧水、『王注老子道德経』、王弼本、徂徠学派

### はじめに

日本における漢学の受容について簡潔にまとめられている吉川幸次郎「受容の歴史——日本漢学小史——<sup>1)</sup>」に「江戸時代では、中国の書物が、洪水のように読まれ、したがって輸入され、覆刻された。そうして中国系の学問が、その時代の学問の王座にいた、それはもはや足利期のように（中略）専門家だけのものでなく、ひろく武士の、また町人の、教養として、一般に普遍したのである<sup>2)</sup>」とある。このように、日本において漢学が最も盛んであったのは江戸時代である。

1) 吉川幸次郎『吉川幸次郎全集』第17巻所収（筑摩書房、1969年）。

2) 前掲、吉川幸次郎「受容の歴史——日本漢学小史——」26頁。

江戸時代前期に盛行したのが朱子学と古学派であったことはよく知られている<sup>3)</sup>。朱子学派には、藤原惺窩(1561-1619)をはじめとして、林羅山(1583-1657)、松永尺五(1592-1657)などがある。元和年間(1615-1624)頃には江戸幕府が林羅山、林鷺峰(1618-1680)父子に信頼を寄せたことを機に、当時の儒学は朱子学が主流となりつつあった<sup>4)</sup>。

一方の古学派は、伊藤仁斎(1627-1705)や荻生徂徠(1666-1728)によって確立した学派である。古学派は朱子学以前の儒教に回帰しようとするもので、徂徠はこの立場に立ち、「性」や「理」を説く朱子学派を批判した。

徂徠が朱子学を論難している記述に『学則<sup>5)</sup>』三の「後儒乃非聃、而傲其尤、言之弗已。名存而物亡。仁義道德之説盛、而道益不明。方今之世、滔滔者天下皆聃之徒哉」(後儒乃ち聃を非として、その尤に傲う、之を言いて已まず。名存して物亡ぶ。仁義道德の説盛んにして、道は益ます明らかならず。方今の世、滔滔たる者は天下皆な聃の徒なるかな)がある。これは老子の思想が憶測に憶測を重ねた空論をもてあそぶものであると述べたうえで、「後儒」つまり朱子学などを「聃の徒」すなわち老子の徒としてその学説の主観性・観念性を攻撃するものである。このように徂徠はしばしば老荘などの語を用いて「後儒」を批判している。

一般的に徂徠は老子に対して否定的であったとされる<sup>6)</sup>。ただし、徂徠の老子批判には一定の留保が必要である。たとえば、『護園十筆<sup>7)</sup>』七には次のようにある。

老子者孔子所師学礼也。故知礼莫如老子。……世君子囿於礼楽之中、不自知其為先王之術也。老子独超然有以見於礼楽之源。然生不遭聖王時、無所用其才。故為書以詔後世。

(老子は孔子の礼を師学する所なり。故に礼を知ること老子に如くは莫し。……世の君子は礼楽の中に囿われ、自ら其の先王の術を為すを知らざるなり。老子独り超然として以て礼楽の源を見る有り。然れども生じて聖王の時に遭わず、其の才を用うる所無し。故に書を為して以て後世に詔ぐ。)

聖人を「制作者」とする徂徠は、老子が「礼楽の源を見る」ことができたものの、「聖王の時に遭わ」なかったために「其の才」を用いることができなかったという。このように徂徠は老子を礼楽にかかわる

3) 山岸徳平『近世漢文学史』(汲古書院、1987年)「序章」に「江戸前期には、朱子学派と古文辞学派の人達の間、詩人・文人が多く出た」(2頁)とあるのを参考。

4) 以上は前掲、山岸徳平『近世漢文学史』「二、江戸期儒学の諸派、1 朱子学」を参考。

5) 島田虔次編『荻生徂徠全集』第1巻・学問論集所収(みすず書房、1973年)。なお、本稿において諸書の原文を引用する際は、一部を除いて常用漢字を用いることとする。

6) 尾藤正英「荻生徂徠の「老子」観」(日本歴史学会編『日本歴史』第300号所収、吉川弘文館、1973年)には「老子の思想は、やはり「聖人の道」に反する性格のものであることが、自明の前提とされているようであり、(中略)積極的にこれを支持しているようには見えない」(45頁)とあり、野口武彦「徂徠学派における『老子』受容」(同『江戸人の歴史意識』所収、朝日新聞社、1987年)には徂徠の『老子』に対する判断について「もっぱら否定論を展開している」(32頁)とあるのを参考。

7) 西田太郎編『荻生徂徠全集』第17巻・随筆1所収(みすず書房、1976年)。

人物として積極的に認める記述も残しているのである<sup>8)</sup>。

老子研究に功績のあった徂徠門下に『老子』王弼本の校訂を行ない『王注老子道德経』二卷（以下、宇佐美本と略称）を著わした宇佐美瀧水<sup>しんすい</sup>（1710-1776）がいる。瀧水は「徂徠の七哲<sup>9)</sup>」に数えられる高弟である。それにもかかわらず、宇佐美本に関する研究はきわめて少ない<sup>10)</sup>。そこで本稿ではこの宇佐美本について考察したい。とくに瀧水の校訂作業の一側面を明らかにすることを目的とし、そこに引用されている注釈書について考察することとする。なおこれは、徂徠学派による老荘受容に関する研究の一環である。

## 一 『老子』の受容と展開

宇佐美本について考察するに先立ち、まずは日本における『老子』受容について見ることにする。日本における老荘思想の受容について論じている最近の研究に、王廸氏の『日本における老荘思想の受容<sup>11)</sup>』がある。王氏は書誌学的観点から天平時代以前から江戸時代にかけての日本における老荘思想について詳細に論じている。ここでは王氏に従って、とくに『老子』関係書物の受容について見たい。

老荘関係書物あるいはその思想がいつごろ日本にもたらされたかは明らかではない。ただし、5世紀の江田船山古墳の銘文に「服此刀者長寿」とある。ここに見える「長寿」の語は『老子』や『荘子』にしばしば見られる「長生」の語と共通する。このことから、天平時代以前すでに老荘思想の影響があったとされる。

平安時代に藤原佐世によって編纂された『日本国見在書目録』は891年から897年に成立した、現存する日本最古の書籍目録であるが、ここには『老子』関係書物が二十五種著録されている。そのなかで初めに挙げられているのが『老子二同柱下史李耳撰漢文時河上公注』、その次に挙げられているのが『王弼注』である。この二書については「唐以降最も権威のある注釈書として伝わってきた<sup>12)</sup>」とされる。

- 
- 8) なお、徂徠における老子学については前掲、尾藤正英「荻生徂徠の「老子」観」と前掲、野口武彦「徂徠学派における『老子』受容」を参考。
- 9) このことは、市原蒼海『宇佐美瀧水と其の父習翁』（千葉庶民社、1941年）に見える。徂徠を中心とし、七人の弟子が一つの座卓を囲んで催された宴会の様子を描いている「護園譚集図」がある。そこには徂徠のほか山県周南、太宰春台、宇佐美瀧水、服部南郭、平野金華、万庵、安藤東野が描かれている。市原氏によればこの七人が「徂徠の七哲」である。また、前掲、山岸徳平『近世漢文学史』には、徂徠がこの七人に自身を加え、「護園の八子」と称していたとある。
- 10) 管見のおよぶ限り、宇佐美本を主題として論じた先行研究は、波多野太郎「瀧水の老子の校訂と南郭」（同『老子道德経研究』所収、国書刊行会、1979年）、佐野正巳『松江藩学芸史の研究』（明治書院、1981年）「第八章 江戸松江藩邸における古文辞学の展開」の二つである。波多野氏は瀧水の説に服部南郭の影響があることを、東京文科大学図書館所蔵の『老子』に引用されている南郭の説と対照しながら論じている。佐野氏は国学との関連から老子の思想を取りあげている。なお、武内義雄「日本における老荘学」（『武内義雄全集』第6巻・諸子篇1所収、角川書店、1978年）において「四 徂徠門下の老荘学」の項が立てられているが、そこでは海保青陵『老子国字解』が取りあげられ、瀧水については青陵の師として簡単に触れられているのみである。
- 11) 国書刊行会、2001年。
- 12) 前掲、王廸『日本における老荘思想の受容』108頁。

鎌倉時代には、入宋六年（1235-1241）の禅僧である圓爾辨圓（1202-1280）が多くの書籍を日本へ持ち帰った。その目録である『東福寺普門院経論章疏語録儒書等目録』には『直解道德経』、『老子経』などが著録されていた。当時もっぱら読まれていた『老子』テキストは河上公本であったが、室町時代には宋の林希逸『老子虞齋口義』を参照した書き込みのある『老子』テキスト<sup>13)</sup>があり、当時すでに『老子虞齋口義』も読まれていた。

江戸時代については、『江戸時代書林出版書籍目録<sup>14)</sup>』と『享保以後江戸出版書目——新訂版——<sup>15)</sup>』の記録から当時の老荘関係書物の出版状況が明らかにされている。江戸時代における老荘関係書物は、享保十四年以前は口義本系統が圧倒的に多く、未出書目を除いて合計百七十八点あるなか、口義本がその五割を占めている。さらに、江戸時代初期における唯一の明代の文献である焦竑『老荘翼』も、寛文から正徳年間（1661-1715）にかけて絶えず出版されていた。ところが、享保十四年（1729）を境に翼本はもとより口義本も出版されなくなった。口義本の盛行と入れ替わるように出版の途絶えていた河上公本と王弼本は、延宝三年（1675）から河上公本、宝暦四年（1754）には王弼本の出版記録が再び現われるようになるのである。

以上から、江戸時代における『老子』研究は、享保十四年頃までは林希逸による『老子虞齋口義』本系統を中心として行なわれてきたと考えられる。それと並行して『老子翼』も継続的に読まれていた。ただし、これ以降はこれらの出版が途絶え、河上公本や王弼本などが再び研究の対象とされるようになったのである。

## 二 『老子』王弼本について

代表的な『老子』テキストに河上公本と王弼本の二種がある。ここではそのなかでも、瀧水が校訂を行なった王弼本について簡単にまとめておきたい。

王弼（490-513）について『三国志』魏書、鐘会伝に次のようにある。

初、会弱冠與山陽王弼並知名。弼、好論儒道、辞才逸辯、注易及老子。為尚書郎、年二十餘卒。〔弼、字輔嗣、何劭為其伝曰、弼幼而察慧、年十餘好老氏、通辯能言。〕<sup>16)</sup>

（初め、会（鐘会）弱冠にして山陽の王弼と並びに名を知らる。弼、儒道を論ずるを好み、辞才逸

13) ここで王氏は、阿部隆一『増訂中国訪書志』（汲古書院、1983年）の「老子虞齋口義……室町期の朱点朱引墨訓点が付され、眉上にも書入がある」との記述、前掲の武内義雄「日本における老荘学」における「私の手に入った足利時代の抄写に係る河上公註老子である。（中略）欄外のところどころに「新註」として林希逸の口義が引用されている」という指摘および、山城喜憲「京都大学附属図書館蔵 清家文庫『老子経抄』翻印並びに校異・解題」（『斯道文庫論集』第26輯、慶応義塾大学附属研究所斯道文庫、1991年）の「室町中期以後書写の古鈔本になると、本文は河上公章句本でありながら、宋人林希逸の「発題」を首に冠し、その注説が移写書き入れされることが一般的となる」という指摘を挙げる。

14) 斯道文庫編、井上書房、(1)：1962年、(2) (3)：1963年。以下、『江戸目録』と略称。

15) 朝倉治彦・大和博幸、臨川書店、1993年。以下、『享保書目』と略称。

16) 原文は中華書局本に従った。〔 〕は原注を示す。なお、本稿で引用する二十四史はいずれも中華書局本に従う。

辯、易及び老子に注す。尚書郎と為り、年二十餘にして卒す。〔弼、字は輔嗣、何劭其の伝を為して曰く、弼幼くして察慧、年十餘にして老氏を好み、通辯にして能く<sup>ものい</sup>言う。〕

以上から、王弼が幼いころから聡明であり、弁論を得意としていたことがわかる。さらに『老子』だけでなく『易』についても注を施していたことは周知のことである<sup>17)</sup>。

『老子』王弼本を初めて著録した正史の書籍目録は『隋書』経籍志である。そこに「老子道德経二卷〔王弼注、梁有老子道德経二卷……〕」とある。このほか、『旧唐書』経籍志、『新唐書』芸文志、『宋史』芸文志のいずれにも王弼本が著録されている<sup>18)</sup>。

王弼本の体裁については、北宋末、政和五年（1115）の晁説之繕写の王弼本『老子』の跋文に「王弼老子道德経二卷、弼題是書曰道德経、不折乎道・徳而上下之、猶近於古歟」（王弼老子道德経二卷、弼是の書に題して道德経と曰い、道・徳を折けて之を上下とせず、猶お古に近きか）とある。さらに乾道六年（1170）の熊克鏤板の王注老子の跋文に、「既又得晁以道先生所題本。不分道・徳而上下之、亦無篇目」（既に又た晁以道先生の題する所の本を得たり。道・徳を分けて之を上下とせず、亦た篇目無し）とある。これらの記述から、宋代の王弼本は上下篇ともに「道德経」と標し、さらに章ごとに章目をつけていなかったことがわかる。この形式が王弼本の旧式に近い姿であったと考えられる。

ところが、『四庫全書総目<sup>19)</sup>』子部道家類には「錢曾読書敏求記謂、弼註老子已不伝」（錢曾の「読書敏求記」に謂わく、弼註老子已に伝わらず）とある。『読書敏求記』とは清代の蔵書家として知られる錢曾がその蔵書にある善本を著録した目録であり、同書<sup>20)</sup>を見ると、確かに「惜乎輔嗣注不伝」（惜しいかな輔嗣注伝わらず）とある。これらの記述から、王弼本は清代にはほとんど流布していなかったことがわかる。

現在、王弼本の代表的なテキストは、道蔵本、四庫全書本、武英殿聚珍版本であり、四庫全書本が採用したのは紀昀家蔵本である。この三書には晁・熊両者の跋文があるため、いずれも熊刻本によっていると思われる。つまり、現行の王弼本はいずれも晁説之本に由来するものである。ただし、本文に日本の形式の特徴が備わっておらず、後人の手が加わっていることがわかる<sup>21)</sup>。

17) 『隋書』経籍志には「周易十卷〔魏尚書郎王弼注六十四卦六卷、……、王弼又撰易略例一卷、……〕」とあるほか、「論語積疑三卷〔王弼撰〕」も著録されている。

18) ただし『旧唐書』経籍志には「玄言新記道德二卷〔王弼注〕」、『新唐書』芸文志には「王弼注新記玄言道德二卷」と、異なった書名で著録されている。しかし『宋史』では再び「王弼老子注二卷 又道德経略帰一卷」となっている。永瑤等撰『四庫全書総目』（中華書局、1965年）子部道家類には「旧唐書経籍志作元言新記道德二卷、亦称弼註。名已不同。新唐書芸文志又以元言新記道德為王肅撰、而弼所註者別名新記元言道德。益為舛互。疑一書而誤分為二、又顛錯其文也」とあり、『旧唐書』と『新唐書』に著録されている書名は誤りであるという。

19) 前注参照。

20) 書目文献出版社、1984年。

21) 前掲、『四庫全書総目』子部道家類に「晁以道謂王輔嗣老子題曰道德経、不析乎道德而上下之、猶近乎古。此本乃已析矣、安知其他無妄加竄定者乎。其跋作於慶元戊午、已非晁熊所見本。則經典積文之遭妄改、固已久矣」とある。また『老子』武英殿聚珍版の序文に「後諸家之解曰、衆弼書逐微、僅有伝本、亦多訛謬」とある。なお、王弼本については、武内義雄「老子原始」および「老子の研究」（いずれも『武内義雄全集』第5巻・老子篇所収、角川書店、

### 三 宇佐美瀧水について

王廸氏の研究は江戸時代以前に主眼が置かれているため、江戸時代の漢学者についてはほとんど言及されておらず<sup>22)</sup>、冒頭で述べた瀧水についても名前が挙げられている程度にすぎない。まずは瀧水の生涯について述べたい<sup>23)</sup>。

宇佐美瀧水は宇佐美習翁の四男として宝永七年（1710）、上総国夷隅郡長者村に生まれた。名は恵、字は子迪、通称は恵助。瀧水は号であるが、その由来については瀧水の弟子であった積雲室（1753-1827）の『雲室随筆』に瀧水の言葉として「我は上総の国夷水郡の産なり。夷水古往瀧水と書せり故に是を号とせり」と見える。「夷水」は楚の地を流れていた漢水の支流「鄢水」の古名であるが、溪谷を成していたため「潜水」、「瀧水」とも呼ばれていた。これにちなんで「瀧水」と号したのである。

瀧水の父である習翁は商人であったものの学問に熱心で、その影響もあって瀧水も幼いころから学問にはげんでいた。瀧水の叔父の妻が徂徠の従姉であり、徂徠と遠縁にあたることから、十七歳の時（享保十一年、1726）に護園に入門し徂徠に師事した。しかし入塾当初瀧水の評判はかんばしくなく、『雲室随筆』には瀧水の言葉として「常に咄されしは、我等は鈍き生れ故、常々徂徠に、学問やめよやめよと叱られたる事度々なりき」とある。しかし瀧水は元来篤実な性格で、師の教えを守り講習に余念がなかったため、徂徠の高弟の一人である三浦竹溪（1689-1756）は瀧水を高く評価し期待をかけていた。徂徠もまた瀧水が自身と血縁関係があったためか、よくそばにおいていた。しかし、瀧水入塾の三年後（享保十四年、1729）に徂徠は没してしまう。

徂徠没後も瀧水は六年間護園にとどまり、塾生とともに研鑽を積んだ。その後瀧水は同じく徂徠門下の板倉美仲（1709-1747）を伴って上総に帰り、学業に励むかたわら開塾する。その塾は「陽谷堂」といった。五年後の元文四年（1739）、美仲は瀧水に先立って江戸に戻るが、その後も瀧水は上総にとどまった。美仲と別れて五年（延享元年、1744）、瀧水もまた江戸に出て、芝三島街に私塾を開いた。私塾を開いて五年目の寛延元年（1748）、瀧水は松江藩に任用されることになる。その後瀧水は松江藩藩主である松平宗衍の支援を受け、瀧水の自著だけでなく多く徂徠の遺著を校刻、上梓している。瀧水のこの仕事は『先哲叢談』に「瀧水篤信徂徠、畢力校刻其遺著。雖高足弟子所不及也」（瀧水篤く徂徠を信じ、力を畢して其の遺著を校刻す。高足の弟子と雖も及ばざる所なり）と称されるほどの精励ぶりであった。この間、宝暦元年（1751）に『孫子国字解』を宗衍に献上、宝暦十一年（1761）に『四家雋』を上梓、明和三年（1766）に『補儲編』を出版した。そして明和七年（1770）、六十一歳の時に『王注老子道德経』を刊行する<sup>24)</sup>。その六年後の安永五年（1776）に六十七歳で死去した。

1978年）、金谷治『老子』（講談社・講談社学術文庫、1997年）を参考。

22) 王氏が江戸時代の漢学者として論じているのは、林羅山、人見卜幽軒、沢庵宗彭である。

23) 以下、瀧水の生涯については、前掲、佐野正巳『松江藩学芸史の研究』、原念齋・東条琴台著『先哲叢談』（東学堂、1892年）、積雲室『雲室随筆』（林縫之助編『芸苑叢書』所収、吉川弘文館、出版年未詳）、前掲、市原蒼海『宇佐美瀧水と其の父習翁』、市原蒼海『護園雑筆並宇佐美瀧水像伝』（市原照、1942年）、澤井啓一編『瀧水叢書』（ぺりかん社、1995年）を参考。

24) 藩主への上書類の多くは『瀧水叢書』に収められている。ほかに寛延元年以降に出版されたものとして『弁州七絶

## 四 『王注老子道德経』について

### 1 目録の記述

『和刻本漢籍分類目録——増補補正版——<sup>25)</sup>』には次のように著録されている。

老子道德真経二卷 魏王弼注 唐陸徳明音義宇佐美恵〔瀧水〕校 明和七刊（江、須原平助等）  
同 同（次印、江、千鍾堂・花説堂）  
同 同〔明治印〕  
同 同 同 昭和四刊（活版、東、文求堂）

このように宇佐美本は何度も出版されていることがわかる。『無求備斎老子集成』を編纂したことで知られる巖靈峯の『周秦漢魏諸子知見書目<sup>26)</sup>』には「大正十三年文求堂排印本、係上海商務印書館代印、題：「王注老子」とあり、民国期の中国でも出版されていたことがわかる。

『老子』王弼本を校訂した最新の研究に樓宇烈氏の『老子道德経注校釈<sup>27)</sup>』がある。これは『老子』本文ではなく王弼注を校釈しているものであるが、各所に宇佐美本が引用されている。

また、1952年から1954年にかけてそれぞれ『横浜市立大学紀要』単行一冊で発行された波多野太郎氏の「老子王注校正<sup>28)</sup>」もすぐれた仕事である。しかも、凡例に「独明和七年版宇佐美本勝処最多、流布尤広。故為底本」（独り明和七年版宇佐美本は勝処最も多く、流布すること尤も広し。故に底本と為す）とあるように宇佐美本を底本としていることから、宇佐美本に対する評価の高さがわかる。

ではなぜ宇佐美本は日中両国でこれほどの高い評価を得ることができたのであろうか。そこで次に宇佐美本の特徴を、そこに引用されている注釈書を通して考察したい。

### 2 校訂の意図と注釈書

瀧水の師である徂徠は老子に対して否定的であったが、ときに礼樂にかかわる人物として評価もしていた。では瀧水は老子をどのように見ていたのであろうか。

宇佐美本の序文「刻老子王註序」では『荀子』天論篇の「老子有見於詘、無見於信」（老子は詘を見る有るも、信ぶるを見る無し）という語を引用し、老子が謙虚で従順な態度を重視するという屈曲した面

---

解考証』、『譚園録稿』、『古文矩』、『絶句解考証』、『絶句解拾遺考証』、『徂徠先生素問評』、『文変考』がある。なお、ここに挙げたものは『補訂版 国書総目録』（岩波書店、(1) (2) : 1989年、(3) : 1990年）に出版年が明記されているものである。

25) 長澤規矩也著・長澤孝三編、汲古書院、2006年。

26) 中華書局、1993年。以下、『知見書目』と略称。

27) 中華書局・新編諸子集成、2008年。

28) 前掲、波多野太郎『老子道德経研究』所収。これは宇佐美本の後に出版された日中両国の文献をも用いて王弼注まで緻密に校訂するものである。

のみを見ていると批判する。その一方で「周末諸子之言、各有一長、先王之道之裂也<sup>29)</sup>」(周末諸子の言は、各おの一長有り、先王の道の裂けるなり)ともいう。先秦諸子の言は先王の道が分かれた一部であるから、『老子』にも長所があるというのである。ここから瀟水が『老子』に対して批判的ではありつつも、「先王の道」という観点から一定の評価を与えていたことがわかる。

次に、校訂作業に関しては「刻老子王註序」に次のようにいう。

老子正文、諸書所引有不存者、則固有脱文、而文字異同亦甚多矣。焦竑翼註有考異、王註旧刻附孫鉞古今<sup>(ママ)</sup>改正。今共標於層、冠以考異攷正。二考外尚有異同、諸書隨見隨記。及王註錯誤今改正者、共冠考一字而標於層。陸徳明音義便于誦読、又拳異同。誤脱間有、不可改補、加圈兮附王註。王註今本多乱脱、無善本可取正。校以歲月、或当有所得。余、別有所志、不能專意於此書、以俟後之君子。 明和己丑冬十月

(老子の正文、諸書引く所に存せざる者有れば、則ち固より脱文有りて、文字の異同も亦た甚だ多し。焦竑の翼註に考異有り、王註旧刻に孫鉞の古今攷(攷)正を附す。今共に層に標して、冠するに「考異」「攷正」を以てす。二考の外尚お異同有れば、諸書隨見隨記す。及び王註の錯誤にして今改正するは、共に「考」の一字を冠して層に標す。陸徳明の音義は誦読に便にして、又た異同を拳ぐ。誤脱間ま有るも、改補すべからざれば、圈を加えて王註に附す。王註今本乱脱多く、善本の正を取るべき無し。校するに歲月を以てすれば、或いは当に得る所有るべし。余、別に志す所有れば、意を此の書に専らにする能わず、以て後の君子を俟つ。 明和己丑冬十月)

この序文は末尾にあるように「明和己丑」すなわち明和六年(1769)に書かれた。「王註今本乱脱多く、善本の正を取るべき無し」とあるように、当時王弼本に善本がなかったために校訂を行なったわけである。

校訂の際には焦竑の『老子考異』、孫鉞の『老子古今本攷正』を主に参照し、その内容を眉欄に記すことが述べられている。これ以外にも異同があり、ほかの注釈書によった場合、あるいは王注の誤りを訂正した場合は「考」の字を掲げたうえで随時それを眉欄に記した。陸徳明の『老子音義』は音読に便宜を供するものであり、文字の異同も示されているが、これについては校勘せず○印をつけて王注の後に附したといい、宇佐美本では確かにそのようになっている(図1参照)。

宇佐美本を見ると、眉欄には焦竑『老子考異』、孫鉞『老子古今本攷正』のほか、「考」内の引用文献に焦竑『老子翼』、林希逸『老子虞齋口義』、傅奕<sup>ふえき</sup>『道德経古本篇』、陸徳明『經典釈文』、『韓非子』、『淮南子』、『列子』、『群書治要』、『初学記』、『戦国策』がある。これらの書物のうち、瀟水が主に参照した『老子考異』、『老子古今本攷正』のほか、『老子』の注釈書である林希逸『老子虞齋口義』と傅奕『道德経古本篇』について見ることとする。

29) 原文は、宇佐美瀟水『王注老子道德経』(明和七年刊本)に従った。



### 3 焦竑『老子考異』一卷

焦竑（1541-1620）については、『明史』焦竑伝に次のように見える。

焦竑、字弱侯、江寧人。為諸生、有盛名。……竑博極群書、自經史至稗官・雜説、無不淹貫。善為古文、典正馴雅、卓然名家。……万曆四十八年卒、年八十。

（焦竑、字は弱侯、江寧の人。諸生と為り、盛名有り。……竑博く群書を極め、経史より稗官・雜説に至るまで、淹貫せざる無し。善く古文を為し、典正馴雅、卓然として名家なり。……万曆四十八年卒す、年八十。）

「博く群書を極め、経史より稗官・雜説に至るまで、淹貫せざる無し」とあるように、焦竑は経書や歴史書をはじめ、小説や雑駁な説にまで広く精通していた。

上引の「刻老子王註序」に「焦竑の翼註に考異有り」とあるように、『老子考異』（図2参照）はもともと焦竑『老子翼』二卷（以下、翼本と略称）に附されていたものである<sup>30)</sup>。翼本は『四庫全書総目』子部道家類に「是編輯韓非以下解老子者六十四家、而附以竑之筆乘、共成六十五家。各採其精語、裒為一書」（是れ韓非以下老子を解する者六十四家を編輯し、附するに竑の筆乗を以てし、共に六十五家と成る。各おの其の精語を採り、<sup>あつ</sup>裒めて一書と為す）とあるように、多くの注釈を集めているほか、焦竑自身の『筆乘』の記事を加えている。しかしそれらの大部分は『道蔵』に収録されている文献からの引用<sup>31)</sup>で、孫引きも多いと酷評されている<sup>32)</sup>。

『老子考異』の序文には、次のようにある。

薛君采氏作老子集解、別為考異一篇附焉。顧其所見裁十数本耳。余、觀卷軸既多、異同滋甚。其為余所安者、已載正經。而悉以其餘系之卷末、仍名曰考異。<sup>33)</sup>

（薛君采氏「老子集解」を作し、別に「考異」一篇を為して附す。顧みるに其の見る所裁かに十数本のみ。余、卷軸を<sup>み</sup>觀ること既に多く、異同<sup>ます</sup>滋ます甚し。其の余の<sup>あん</sup>安ずる所を為す者は、已に正經に載す。而して悉く其の餘を以て之を卷末に<sup>か</sup>系き、仍お名づけて「考異」と曰う。）

翼本で64家の説を抄録した焦竑にとって、明の薛君采による校訂作業は不十分なものであった<sup>34)</sup>。そ

30) 『明史』芸文志、道家類に「焦竑老子翼二卷、考異一卷」とあり、前掲、嚴靈峯『知見書目』にも「末附「附録」及「考異」とある。

31) 前掲、『四庫全書総目』子部道家類に「所採諸説、大抵取諸道蔵、多非世所常行之本」とある。

32) 前掲、武内義雄「老子の研究」に「大部分は道蔵中のもので古い注釈は大抵孫引きにすぎない」（251頁）とあるのを参考。

33) 原文は万曆十六年王元貞刊本（嚴靈峯編『無求備齋老子集成』所収）に従った。

34) 薛君采『老子考異』の体裁は『老子』本文から校訂箇所を抜粋し、注を記すという形式である。ただし、ここでは具体的な書名は引用せず、「一作」として述べているものが多い。薛君采『老子考異』は清道光李錫齡輯刊借陰軒叢書本（嚴一萍選輯『百部叢書集成』所収）がある。

ここで焦點は翼本の本文中の案語に記せなかったものを巻末にまとめ、それを「考異」と名づけたという。現行の『老子虜斎考異』を見ると、『老子』本文から校訂すべき箇所を抜粋し、そこに注をつけている。注には多くの文献が引用されているが、なかでも「王弼本」、「碑本<sup>35)</sup>」、「古本」からの引用が多い。ただし王弼注に対して校訂はされていない。

上述したように、翼本は日本では『老子虜斎口義』と並行して正徳年間まで継続的に読まれていた。『江戸目録』によれば、寛文無刊記『書籍目録』、寛文十年（1670）刊『増補書籍目録』、寛文十一年（1671）刊『新板増補書籍目録』、延宝三年（1675）刊『古今書籍題林』ならびに『新增書籍目録』、天和元年（1681）刊『書籍目録大全』、貞享二年（1685）刊『改正広益書籍目録』、元禄五年（1692）刊『広益書籍目録』、元禄九年（1696）刊『増益書籍目録大全』、元禄十二年（1699）刊『新版増補書籍目録』、宝永六年（1709）刊『増益書籍目録大全』、正徳五年（1715）刊『増益書籍目録大全』に翼本が著録されている。十二冊もの書籍目録に著録されていることは、それだけ翼本の需要があり、広く読まれていたことを示している。ただし注目されるのは、翼本に関する注釈書がこれらの目録にまったく著録されていないことである。これは、翼本は何度も出版を重ねたものの、注釈書が記されるほどには研究されていなかったことを示している。

#### 4 孫鉉『老子古今本攷正』一巻

孫鉉について万斯同撰『明史<sup>36)</sup>』孫鉉伝に「孫鉉、字文融、餘姚人、礼部尚書、陞四子也。挙万曆二年会試第一。当入翰林、為張居正所沮、授兵部主事」（孫鉉、字は文融、餘姚の人、礼部尚書、陞<sup>しょう</sup>の四子なり。万曆二年会試第一に挙げらる。当に翰林に入るべきも張居正の沮む所と為り、兵部主事を授けらる）とある。会試に首席で通り、科挙合格者のなかでもエリートのみが配属される翰林院に入るはずであった。それは張居正によって阻まれてしまったが、孫鉉が優れた学者であったことは確かである。中国の古典の善本を著録している『中国古籍善本書目<sup>37)</sup>』に、孫鉉の著作として子部に『老莊合刻』、『列子』、『劉子』などが見え、道家に精通していたこともわかる。

ここに見える『老莊合刻』は、加賀藩前田家に伝来した漢籍の目録『尊経閣文庫漢籍分類目録<sup>38)</sup>』に「老莊合刻 明孫鉉 鍾惺 老子道德経二篇 道德経上経二巻道德経下経二巻老子考異附 老子解二篇古今本攷正附」と著録されており、『老子古今本攷正』（以下、『攷正』と略称、図3参照）がもとは『老子合刻』に附されていたことがわかる<sup>39)</sup>。

さらに『知見書目』には「日本享保七年、千鍾坊須原屋茂兵衛刊、阜谷東贊校本（無求備齋蔵）」とある。ここに見える「阜谷東贊」とは江戸の漢学者、岡田贊のことである。岡田贊は、字は子贊、号は

35) おそらくは翼本で採用されている開元御註道德経碑のことであろう。

36) 清抄本（《続修四庫全書》編纂委員会編『続修四庫全書』330所収、上海書籍出版社）による。孫鉉は正史の『明史』にはごく簡単に言及されているだけで、その伝記は万斯堂の同書が最も詳しい。

37) 上海古籍出版社、1994年。

38) 秀英舎、1934年。

39) なお、前掲、『中国古籍善本書目』には「老莊合刻六巻 明孫鉉評点 明万曆刻本 老子道德経二巻古今本考證一巻 莊子南華経三巻」とある。ここにいう「古今本考證」とは『攷正』のことであろう。

阜谷、権兵衛と称した。東賛は別号であろう<sup>40)</sup>。

子賛もまた王弼本を校訂している。その書は『享保書目』によれば、『老子道德経』の名で享保十七年（1732）に出版されている。この書に孫鉞の『攷正』が附されているのである。なお、『知見書目』では「享保七年」刊とされているが、上述の『享保書目』の記録や、子賛による『老子道德経』巻末の日付が「享保十七年秋八月」となっていることから、「享保七年」は「享保十七年」の誤りであろう。『攷正』や『老荘合刻』は中国では正史の目録や『四庫全書総目』に著録されていないものの、日本で出版されていたことがわかる。

子賛『老子道德経<sup>41)</sup>』所収の『攷正』には序文も跋文も記されていない。その体裁は焦竑『老子考異』と同様、章ごとに『老子』本文の校訂箇所を抜粋してそこに注を附すというものである（図4参照）。ただし注には「今本」や「一作」との語は見えるものの、具体的な書名は挙げられておらず校訂箇所も少ない。また『攷正』も王弼注に対しては校訂を行っていない。

## 5 林希逸『老子虞齋口義』二卷

林希逸については池田知久氏<sup>42)</sup>と大野出氏<sup>43)</sup>に従って述べる。『老子虞齋口義』（以下、口義本と略称）の著者である林希逸については正史に伝がなく、程子学の流れを記した『閩中理学淵源考』に「林希逸、字肅翁、号虞齋、福清人。……所著有易講・春秋正附篇・考工記解・竹溪谷稿子<sup>44)</sup>」（林希逸、字は肅翁、号は虞齋、福清の人。……著す所に易講・春秋正附篇・考工記解・竹溪谷稿子有り）とある。

『閩中理学淵源考』に立伝されていることからわかるように、林希逸は朱子学の系統に属する。そのためここには林希逸の著作として『易講』、『春秋正附篇』、『考工記解』、『竹溪谷稿子』が挙げられているものの、『老子』口義は挙げられていない。口義本は『四庫全書総目』にも著録されておらず、中国における『老子』口義の地位の低さがわかる<sup>45)</sup>。

ただし上述したように、口義本は日本においては江戸時代に最も読まれた『老子』注釈の一つであった。『江戸目録』によれば、口義本は翼本と同じ十二冊の書目に著録されている。ここで注目すべきは、

40) 子賛に関する記録は非常に少ない。卒年や学問系統などを記録している長澤規矩也監修・長澤孝三編『漢文学者総覧』（汲古書院、1979年）では、歿年、享年、師名の欄がいずれも空欄になっており、備考欄に「江戸ノ儒者」と書かれている。市古貞次ほか編『国書人名辞典』第1巻（岩波書店、1993年）にも、「生没年未詳」とされ、経歴については「江戸の人」と書かれているにとどまる。ただし、関儀一郎『近世漢学者伝記著作大事典』（井田書店、1943年）によれば、著作に『王注老子補』二巻、『道德経異同考』一卷、『道德指帰論』一卷、『老子古今文考』一卷、『鄭玄注学庸』二巻があるため、『老子』を研究していたことは間違いない。

41) 子賛の『老子道德経』もまた宇佐美本と同様に眉欄に注を附すという形式をとっている。しかし、図1と図4を見比べると、明らかに注の量が宇佐美本より少ない。この点で瀧水の校訂作業の方がはるかに優れていることがわかる。なお、子賛『老子道德経』は享保十七年刊本（巖靈峯編『無求備齋老子集成』所収）によった。

42) 『道家思想の新研究——『莊子』を中心として』（汲古書院、2009年）「第15章 日本における林希逸『莊子虞齋口義』」。

43) 『日本の近世と老荘思想』（ベリかん社、1997年）。

44) 原文は欽定四庫全書本に従った。

45) 林希逸は『老子虞齋口義』だけでなく、『莊子虞齋口義』、『列子虞齋口義』も著しているが、『四庫全書総目』に著録されているのは『莊子虞齋口義』のみである。

これらの目録には林希逸の口義本とともにその訓点本や注釈書が少ないもので一冊、多いものでは四冊著録されていることで、羅山の『老子経道春点』や同人『老子経頭書』などが見える<sup>46)</sup>。十二冊もの目録に著録されつつも注釈書が見られなかった『老子翼』に対し、口義本にはそれを底本とした関連書物が数種類撰述されており、当時の口義本の流行ぶりがわかる。

## 6 傅奕『道德経古本篇』二卷

傅奕(555-639)については武内義雄、島邦男両氏の研究<sup>47)</sup>に詳しいので簡単に述べる。『旧唐書』傅奕伝に「傅奕、相州鄴人也。……注老子、并撰音義、又集魏、晋已来駁仏教者為高識伝十卷」(傅奕、相州鄴<sup>ぎょう</sup>の人なり。……老子を注し、並びに音義を撰す、又た魏、晋已来仏教を駁する者を集め、高識伝十卷を為す)とある<sup>48)</sup>。このように傅奕は『老子』に注を施し、その音義を撰述しただけでなく、魏晋以来の仏教批判の言論を集めた『高識伝』なる書物を著わしていた。確かに『新唐書』芸文志には「傅奕注老子二卷」、「傅奕老子音義〔並卷亡〕」のほか、雑伝記類に「傅奕高識伝十卷」が著録されている<sup>49)</sup>。

宋の謝守灝『混元聖紀』に、傅奕本について次のような記述がある。

唐傅奕考覈衆本。勘数其字云、項羽妾本、齊武平五年、彭城人開項羽妾塚、得望安丘之本。魏太和中、道士寇謙之、得河上丈人本。齊処士仇嶽伝、家之本有五千七百二十二字、與韓非・喻老相參。又洛陽有官本、五千六百三十五字、王弼本有五千六百八十三字、或五千六百一十字。河上公本有五千五百五十五字、或五千五百九十字<sup>50)</sup>。

(唐の傅奕衆本を考覈す。其の字を勘数して云う、項羽妾本、齊の武平五年、彭城人項羽の妾の塚を開き、望安丘の本を得たり。魏の太和中、道士寇謙之、河上丈人本を得たり。齊の処士仇嶽伝う、家の本に五千七百二十二字有り、韓非・喻老と相い參す。又た洛陽に官本有り、五千六百三十五字、王弼本は五千六百八十三字有り、或いは五千六百一十字。河上公本は五千五百五十五字有り、或いは五千五百九十字。)

武内氏は傅奕本が、ここに挙げられている項羽妾本、望安丘之本、河上丈人本、洛陽官本、王弼本二種、河上公本二種の八種を比較して定められたものと推測する。このなかで何本を底本としたか明確な証拠はないと断ったうえで、唐初一般に行なわれていた河上公本を主とし、王弼本も採用していると結論する。

46) 寛文無刊記『書籍目録』には一冊、寛文十年刊『増補書籍目録』には二冊、寛文十一年刊『新板増補書籍目録』には三冊、延宝三年刊『古今書籍題林』には三冊、同年『新增書籍目録』には四冊、天和元年刊『書籍目録大全』四冊、貞享二年刊『改正広益書籍目録』には四冊、元禄五年刊『広益書籍目録』には三冊、元禄九年刊『増益書籍目録大全』には三冊、元禄十二年刊『新版増補書籍目録』には三冊、宝永六年刊『増益書籍目録大全』には三冊、正徳五年刊『増益書籍目録大全』には四冊、口義本関連の文献が著録されている。

47) 前掲、武内義雄「老子の研究」、島邦男『老子校正』(汲古書院、1973年)を参考。

48) 『新唐書』傅奕伝にも「傅奕、相州鄴人。……又注老子、并集晋、魏以来與仏議駁者為高識篇」と見える。

49) 『旧唐書』経籍志には「老子二卷〔傅奕注〕」のみ著録されており、『宋史』芸文志には「傅奕道德経音義二卷」のみ著録されている。

50) 原文は道蔵本に従った。

ただし、先に挙げた謝守灝の文章にはまだ続きがある。「並諸家之註、多少参差。然歴年既久、各信所伝、或以他本相参、故舛戾不一」（諸家の註を並ぶるに、多少参差あり。然れども年を歴ること既に久しく、各おの伝うる所を信じ、或いは他本を以て相い参す、故に舛戾一ならず）と続くのである。鳥氏は『老子校正』でとくにこの箇所に着目している。

鳥氏は謝守灝のこの記述を「河上本は斉時に処士仇嶽の伝へたものであつて王弼本の後に成り、その注は諸家の註を併せてみて一貫して居らず<sup>51)</sup>」といい、傅奕が河上公本を偽書とし、嚴遵本<sup>52)</sup>と王弼本を正統としていたと結論する。そのため、傅奕本には嚴遵本と王弼本の本来の姿が残っているとして、校正の際には傅奕本が貴重な資料になるという。

## 7 注釈書の引用頻度と宇佐美本の特徴

以上、宇佐美本に引用されている『老子』のテキストについて述べてきた。では、これらの文献はどれほどの頻度で引用されているのであろうか。眉欄に「考」と冠したうえで引かれている注釈書の引用数をまとめると、表1のようになる。

（表1）宇佐美本に見える注釈書の引用数

書名	『老子翼』	『老子膚齋口義』	『道德経古本篇』	『經典釈文』	『韓非子』	『淮南子』	『列子』	『群書治要』	『初学記』	『戦国策』
引用数	5	14	1	4	13	7	1	1	1	1

以上が宇佐美本の眉欄が「考」字を附して引用する文献のすべてである。この表から瀧水が王弼本を校訂するにあたり、とりわけ林希逸『老子膚齋口義』と『韓非子』から多く引用していることがわかる。

瀧水が校訂作業において注釈書の中心に据えていたのは焦竑『老子考異』と孫鉞『攷正』であり、『老子考異』は翼本に収められ、『攷正』は岡田子贇が校訂した王弼本に附されて刊行されていた。

日本で出版された『老子』注釈書を用いる一方、『韓非子』からも多く引用しているのは注目に値する。とくに解老篇と喻老篇からの引用が多く、このうち解老篇は『老子』に対する最古の注釈であり<sup>53)</sup>、解老篇には『老子』の原型に近い姿が多く残っているともいえる。瀧水はテキストの原始的な姿を明らかにすることを目的として、『韓非子』の両篇を多用したのである<sup>54)</sup>。これは後年の武内義雄氏の仕事<sup>55)</sup>

51) 前掲、鳥邦男『老子校正』10頁。

52) 嚴遵本は現存する『老子』の最古のテキストといわれ、『隋書』経籍志、『旧唐書』経籍志、『新唐書』芸文志、『宋史』芸文志にそれぞれ著録されている。

53) 前掲、武内義雄「老子の研究」に『韓非子』解老篇について「老子全部に亘って居らぬが、現存する老子の解釈書中最も古いものである」（210頁）とあり、金谷治『韓非子』第2冊（岩波書店・岩波文庫、1994年）解老篇の解説に「『老子』本文についての最も古い解説である」（7頁）とあるのを参考。

54) 『韓非子』の次に引用数が多いのは『淮南子』であり、すべて道応訓から引用されている。『淮南子』道応訓については、前掲、武内義雄「老子の研究」に「体裁は喻老に似ていて、この篇に説明された老子の言はほとんど喻老に見えないものばかりであるから、あるいはもとは前篇と同じ材料から出たものかも知れぬ」（211頁）とあり、やはり『老子』の古い形を残していると考えられる。

55) 武内氏は「道德経析義」（前掲、『武内義雄全集』第5巻・老子篇所収）で王弼本の校訂を行なっている。これは1927

の先駆といえよう。

焦竑の『老子考異』と孫鉉の『攷正』は、ともに『老子』本文から校訂箇所を抜粋して注を附しているが、その抜粋箇所には異同がある。そのため二書を用いることで注の欠如部分を補完し合うことができる。しかも瀧水は『老子』関連書物だけでなく『韓非子』や『淮南子』など様々な文献を用いて、より綿密に校訂している。瀧水は当時入手できる文献を、最大限に駆使して校訂作業を行なったといえよう。さらにその校訂作業は『老子』本文のみならず、王弼注にまで及んでいるのである。それは『四庫全書総目』や瀧水自身がいうように、王弼本の善本が中国にもなかった当時において画期的な作業であった<sup>56)</sup>。

### おわりに

本稿では宇佐美瀧水校訂本『王注老子道德経』について、そこに引用されている注釈書について述べてきた。瀧水によれば校訂を行なった享保六年当時、王弼本の善本はなかった。また、本書に引用されている書物から、瀧水が『老子』を校訂するにあたりどのような文献を用いていたのかがわかる。

宇佐美本の序文「刻老子王註序」にも明示されているように、瀧水はまず焦竑の『老子考異』と孫鉉の『攷正』を注釈書の中心として王弼本の校訂を行なった。

焦竑『老子考異』はその『老子翼』に収録されているものであった。翼本は中国では六十四家の説を集めたものとして評価されてはいるものの、一説では孫引きも多いと批判される面もある。しかし、江戸時代における出版書籍目録の記録からわかるように、日本では広く読まれた『老子』注釈書であった。

孫鉉『攷正』は中国の正史の書目には一切著録されていない。『四庫全書総目』にも著録されておら

---

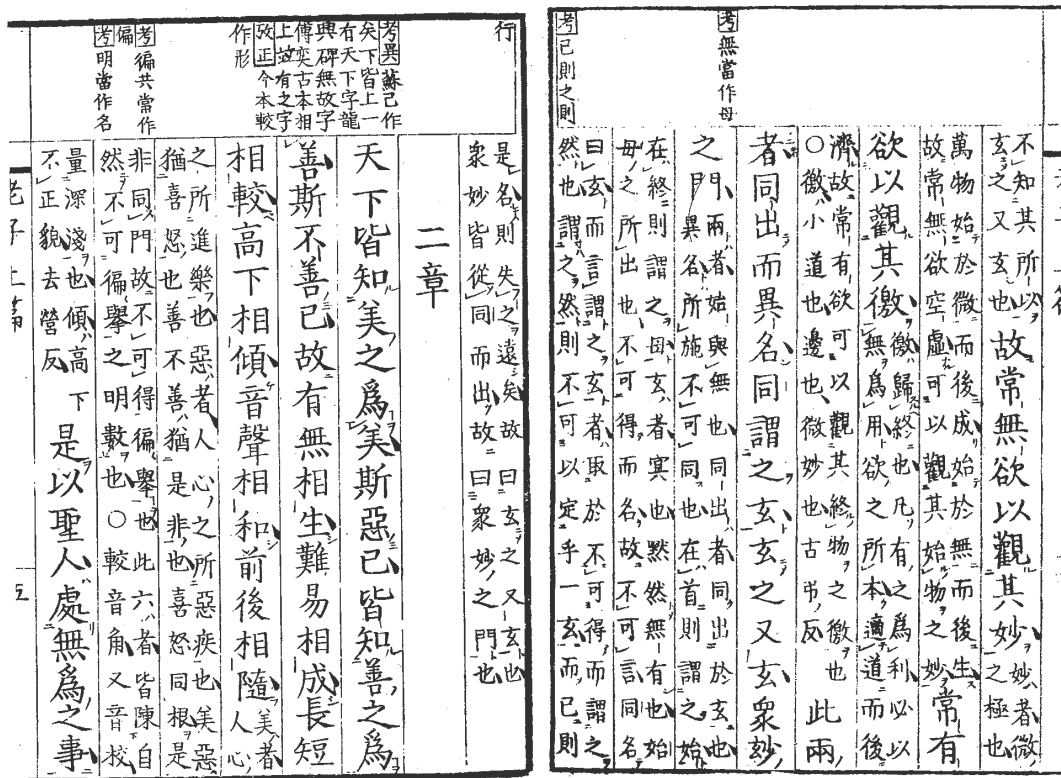
年に東京改造社から出版されたものが、後に修正・補足が加えられ、1947年に改造選書として出版されたものである。この弁言に、「本書においては本文の次に攷異の項を設けて、できるだけ広く旧いテキストをあつめて本文の証定を試みた」(259頁)とあり、『韓非子』の記述に従って『老子』本文を訂正している。また、『淮南子』による校訂箇所も多い。

56) なお、現行の王弼本の源流となり、瀧水も底本とした晁説之(1059-1129)による繕写本について付言しておきたい。晁説之、字は以道、号は景迂叟。北宋末から南宋初に生きた士人で、蔵書家として知られていた。さらに晁説之自身が「雖不敢與宋氏争多、而校讎是正則未肯自讓」(『高山文集』、四部叢刊続編、上海涵芬樓景印旧鈔本、卷十六、劉氏蔵書記)というように、優れた校勘学者でもあった。宋・陳振孫撰『直齋書録解題』(武英殿聚珍版本)道家類には「老子注二卷」が著録されており、そこには「晁説之以道曰、弼本深於老子、而易則未也。其於易多假諸老子之旨、而老子無資於易、其有餘不足之迹可見矣。世所行老子、分道德経為上下卷。此本道德経且無章目、當是古本」として晁説之の『老子』校訂作業に言及している。晁説之の族姪である晁公武は、現存する最古の個人蔵書目録である『郡齋讀書志』(許逸民・常振国編『中国歴代書目叢刊』第一輯・下所収、現代出版社出版、1987年)の著者として知られる。この晁公武もまた道家類「老子道德経二卷」の解題に「因以諸本參校其不同者近二百字、互有得失、乙者五字、注五十五字、塗者三十八字、其間徽宗御注異諸本……」と、各テキストの『老子』本文の異同に言及している。晁公武もまた晁説之の校勘学を受け継いで『老子』校勘を行なったのである。なお、晁説之と晁公武については吾妻重二『朱子学の新研究——近世士大夫の思想史的地平——』(創文社、2004年)「第一部 朱子学まで——北宋期の儒教とその展開、第二篇 士大夫の思潮、第二章 晁説之について——考証学と仏教信仰のあいだ」を参考。

ず、中国ではあまり注目されていない書物である。しかし、日本においては岡田子贇による王弼注校訂本『老子道德經』に附されて出版されていたのであった。

瀧水自身の校訂は眉欄の「考」の部分に示されている。ここに引用されている書物には焦竑『老子翼』、林希逸『老子虞齋口義』、傅奕『道德經古本篇』、陸德明『經典釈文』、『韓非子』、『淮南子』、『列子』、『群書治要』、『初学記』、『戦国策』がある。当時日本はもちろん、中国でもこれほど文献を博捜し、王弼注に至るまで緻密に校訂を行なった例はなく、瀧水の校訂作業がいかにより優れた仕事であったかがわかる。いわば徂徠学派における「考証学」の一成果がここに見られるのである。宇佐美本は日本漢学における本格的書誌研究の先駆として位置づけることができよう。

本稿ではもっぱら眉欄に引用されている注釈書を通して宇佐美本を書誌学的に検討した。徂徠学派が『老子』をはじめとする諸子文献をどのようにとらえ研究していたのか、その内実や思想的意義については今後の課題としたい。



(図1) 宇佐美瀧水『王注老子道德經』(明和七年刊本)

老子考異

古書傳世爲人所竄易者多矣而老子尤其開元注明言我獨異於人而貴求食於毋先無求於兩字予所加也則後人之妄增而不及自道者可勝言哉史遷言著書五千餘言亦其大率耳妄者至盡削語助之詞以就五千之數是史遷一言爲此書禍也薛君采氏作老子集解別爲考異一篇附焉顧其所見裁十數本耳余覩卷軸既多異同滋甚其爲余所安者已載正經而悉以其餘系之卷末仍名曰考異俟世之好古者參焉弱侯題

老子翼 卷之三 早九

第二章 斯惡已蘇已作矣皆知善之爲善皆上一有故有無相生龍輿碑無故字傳奕萬物作焉而不辭碑本作作功成而不居古本作功夫唯不居古本作不處

第三章 使心不亂古本作使民心是以聖人之治也古本治下有使夫知者不敢爲也一無敢字古則無不治古本作無不

第四章 冲古本或或不盈陸本作不滿開元紛碑本作淵兮陸上

(圖2) 焦竑『老子考異』(万曆十六年王元貞刊本)

老子 古今攷正

古今本攷正

○二章長短相較今本較弗居一本作○三章則無不治下今本有○四章淵兮今本今湛兮作乎

似或存今本或○七章長生一作○八章仁一作

人正一作○九章功遂身退今本功成○十章能寵辱一作能無爲乎今本爲○十三章何爲寵辱若驚今本無若寵爲下諸本寵故貴

以身爲天下若可寄天下今本作故貴以身爲

天下愛以身爲天下若可托天下天下者則可以寄於

託於天下○十五章豫兮儼兮其若客與今渙兮若

冰之將釋今本作儼若客久動之徐生今本無

敝一作○十六章五以觀復今本以字各復歸

其根今本無是謂復命今本是謂○十七章太

上下知有之今本下其次親而譽之今本而字

信不足焉今本上有不信焉今本無悠兮作猶

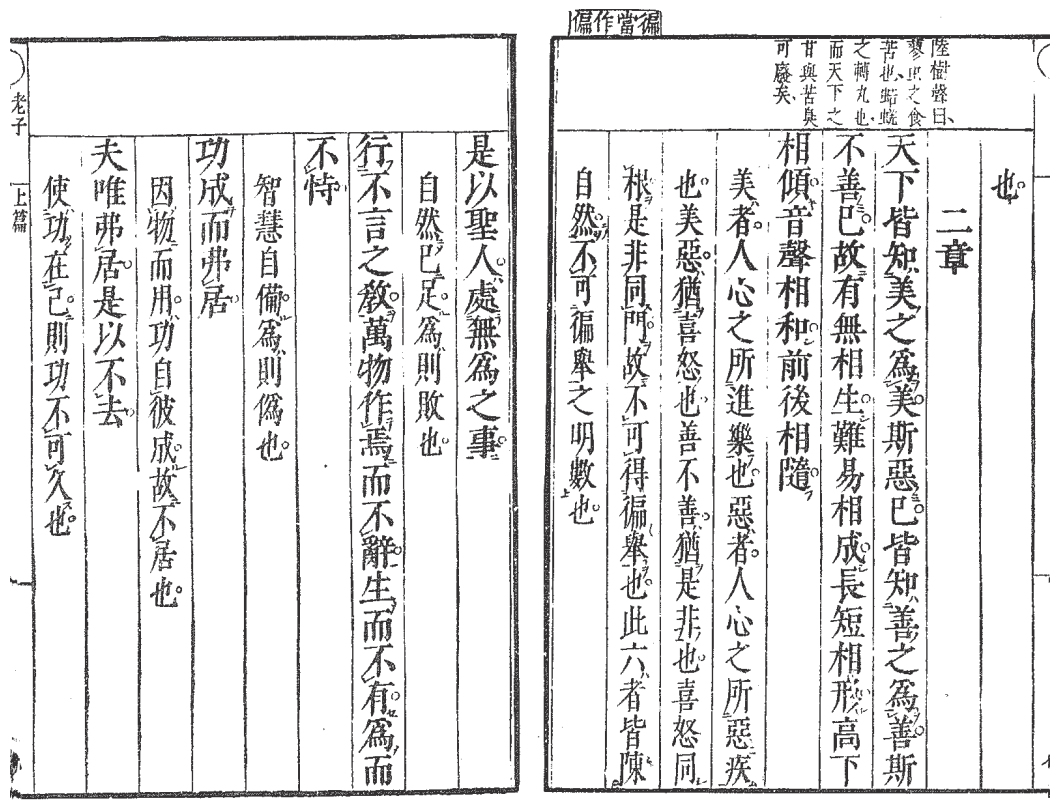
皆謂今本謂○十八章慧智今本作○二十章

不可一作如春登臺今本作如儼儼沌沌今作

渾渾一作澹兮其如海一作忽兮若海颺兮若無止

(圖3) 孫毓『老子古今本攷正』(岡田子贊『老子道德經』所収)





(図4) 岡田子實『老子道德經』(享保十七年刊本)

